

世界屈指の巨匠が 思いを込めて紡ぐ感動巨編

現代を代表する名指揮者ラトルが、母国のトップ・ブランド、ロンドン響との理想的コンビで26年ぶりに芸劇へ帰還。マーラーの超大作「復活」を熱く奏でる。



©Simon Fowler- Erato_Warner Classics



©MarijaKanjaj



Music Director
Sir Simon Rattle

©Oliver-Helbig



©Ranald Mackechnie 2015

マーラーの 「復活」、 詩への思い

「復活」交響曲は「復活あるゆえに、死は消滅ではない」を語る内容の音楽。マーラーは合唱の導入こそ決めたものの、当初思いに見合う歌詞が見つからなかった。だがある日、先輩格の巨匠の葬儀に参列。そこでドイツの詩人クロブシュトックの賛歌「復活」を聞いて衝撃を受け、その歌詞の採用を決めた。本作は極めて多彩な音楽で、大迫

力の響きも美しい旋律もあるし、舞台裏の楽器群まで登場する。それゆえ生で体験すれば終始引き込まれること必至だが、やはり最後に合唱が「よみがえるだろう」と静かに歌い出す瞬間のゾクとする感覚は何物にも代えがたい。そしてそこから終結に至るまで、マーラーの詩への思いを映した感動的な音楽が待っている。

と香気に満ち溢れ、オーケストラ音楽の醍醐味をこの上なく堪能させた。

中でも興味深かったのがマーラーの交響曲第9番。ベルリン・フィルの来日公演で完璧なまでの凄演を成し遂げたこの曲で、今度はより感情のこもった、呼吸感や余情漂う演奏を聴かせたのだ。ベルリン・フィルでは“感銘”を与え、ロンドン響では“感動”をもたらしたともいえる。特に第4楽章は深く心を揺さぶられた。

しからは同コンビのマーラーをまた聴きたいと思うのが人情だ。それが今秋、東京芸術劇場の公演で実現する。演目は交響曲第2番「復活」。巨大編成のオーケストラと2人の独唱、混声合唱によって奏でられる、全5楽章の超大作である。

特別な演目の歴史的名演を 体感する稀有の機会

ラトルは以前からマーラーが十八番。パーミンガム市響やベルリン・フィルと共に交響曲の全曲録音も完成しているし、ベルリン・フィルとの初共演や芸術監督就任コンサートを含めて、ことあるごとに演奏を重ねてきた。その中でも第2番「復活」は、「12歳の時に生演奏を耳にして、指揮をやってみようという気に初めてさせてくれた曲」と語る特別な作品。英国王立音楽院の学生だった18歳の時には自ら奏者を集めて演奏し、パーミンガム市響を離れる際のお別れ公演といった重要な機会に複数回取り上げるなど、思い入れはことのほか強い。いっぽう世界屈指の高機能集団であるロンドン響も、マーラーの複雑なオーケストレーションを明解に表現する腕を持ち、数多の指揮者た

ちと名演を残している。中でも「復活」は、パーンスタイン(かつて同楽団の会長も務めた)による世界最初期のマーラー交響曲全集で演奏を担当。その模様はDVDでもリリースされており、このマーラー伝道師の信頼を得た証となっている。

ラトルはまた「復活」についてこう語っている。「マーラーは世界のすべてをひとつの交響曲のなかに詰めこもうと試み、この世界では、無名の英雄たちの死から、美と恐怖が共存する人生の記憶、そして最後の復活と救済までが巡りまわっています。私にとっては、あらゆるオーケストラ作品の中で最も心揺さぶられる作品のひとつです」。彼は、1986年パーミンガム市響、2010年ベルリン・フィルと本作を録音している。両盤いずれも、ラトルとしては異例なほど感情移入の激しい、壮極まりない名演だ。楽曲に特別な思いを抱くラトルが、コンビ4年目でより関係が熟したロンドン響および世界トップ級のソリストと共に、マーラー演奏に最適な芸劇で響かせる「復活」。熱い感動に包まれた歴史的体験への期待に胸が躍る。

コラム・文：柴田克彦(音楽評論家)

9月29日 ④ 19:00開演 コンサートホール 詳細はHPへ

指揮:サー・サイモン・ラトル
ソプラノ:エルザ・ドライジグ
メゾソプラノ:エリーザベト・クールマン
合唱:首都圏音楽大学合同コーラス
(合唱指導:サイモン・ハルシー、福島章恭)
管弦楽:ロンドン交響楽団
曲目:マーラー/交響曲第2番 八短調「復活」